

丑寅会資料（ガイドをして知った三笠艦あれこれ）

担当 金塚

1、三笠艦までの戦艦の歴史

- 1-1 帆船の時代(ペリー艦隊の来航)
- 1-2 日清戦争
- 1-3 日露戦争
- 1-4 ドレッドノートの出現
- 1-5 第1次世界大戦
- 1-6 ワシントン軍縮条約
- 1-7 記念艦三笠(終戦)

2、大砲(主砲について)

唐発の問題

3、信号の伝達法

- 3-1 信号旗・ラッパ・伝令
- 3-2 36式無線機の開発
- 3-3 要員の養成

4、バルチック艦隊の来航

- 4-1 日英同盟の威力
- 4-2 ドッカーバンク事件

5、その他

- 5-1 燃料(石炭)
- 5-2 オーロウ号

軍縮条約のときに在籍した日本海軍の主力艦

2. ワシントン条約による主力艦の仕分け(そのまま現役、補助艦等に変更、廃艦)

(1) そのまま戦艦として就役した艦

	排水量	主砲	速力	条約終了後の改造	第2次対戦中	備考
金剛	27,500トン	36cm連装x4基	27.5ノット	軍縮脱退後大改造、高角砲・偵察機を搭載	昭和19年台湾海峡で雷撃地没	英国に発注
榛名	27,500トン	36cm連装x4基	27.5ノット	同上	昭和20年江田島で空爆着底	
霧島	27,500トン	36cm連装x4基	27.5ノット	同上	昭和17年ソロモン沖開海戦で砲撃沈没	
扶桑	30,600トン	36cm連装x6基	22.5ノット	同上	昭和19年スリガオ海戦の砲雷撃沈没	
山城	30,600トン	36cm連装x6基	22.5ノット	同上	同上	
伊勢	31,260トン	36cm連装x6基	23ノット	戦前に改造したが、昭和18年に航空戦艦に改造され、昭和20年呉港外で空爆大破着底		
日向	31,260トン	36cm連装x6基	23ノット	戦前に改造したが、昭和18年に航空戦艦に改造され、昭和20年呉港外で空爆大破着底		
長門	33,800トン	40cm連装x4基	26.5ノット	軍縮脱退後大改造、高角砲・偵察機を搭載	横須賀で係留中に爆撃で中破	ビキニ原爆実験に
陸奥	33,800トン	40cm連装x4基	26.5ノット	同上	昭和18年桂島で爆沈	
比叡	19,500トン	36cm連装x3基	18ノット	練習戦艦から昭和15年に改造した	霧島に同じ	

(2) 戦艦以外の艦として就役した艦

		戦艦からの変動記録	
富士	運送艦	1等海防艦 ~ 運用術練習艦 ~ 練習特務艦 ~ 横須賀吉浦海岸に定繋 ~ 被爆着底(S20)	23年解体
敷島	練習特務艦	1等海防艦 ~ 練習特務艦 ~ 佐世保に定繋	23年解体
朝日	工作艦	1等海防艦 ~ 練習特務艦 ~ 潜水艦救難設備を設置 ~ 工作艦 ~ シンガポールで修理任務 ~ カムラン湾で雷撃沈没	
三笠	記念艦	佐世保湾での爆発着底後、1等海防艦、軍縮条約により廃艦のところ各国の了承を得て記念艦として横須賀に	
旧ロシア艦		壱岐・丹後・相模・周防・肥前・石見の6隻、2隻(丹後・相模)はロシアに返還、その他は大正13年までに砲撃目標となり沈没	
摂津	標的艦	明治45年竣工、軍縮条約で標的艦となり、航空爆撃練習等に活用された、昭和20年7月被爆着底	河内級2番艦
加賀	航空母艦	大正10年進水したが、軍縮条約で工事中止、天城の代艦として航空母艦に、ミッドウェイ海戦で空爆沈没	土佐級2番艦
赤城	航空母艦	巡洋戦艦として工事中に軍縮条約で天城と航空母艦に(天城は関東大震災で破損)、ミッドウェイ海戦で空爆沈没	天城級2番艦

軍縮条約のときに在籍した日本海軍の主力艦

(3) 廃棄処分となった艦

		処理方法
周防	旧ロシア戦艦ポビエダ	1902年(明治35年)竣工、明治38年1月捕獲 大正11年9月解体
肥前	旧ロシア戦艦レトヴィザン	1901年(明治34年)竣工、明治38年1月捕獲 大正13年7月、実艦標的として撃沈処分
石見	旧ロシア戦艦アリヨール	1904年(明治37年)竣工、明治38年1月捕獲 大正13年7月 実艦標的として撃沈処分
香取	香取級一番艦	1890年(明治25年)竣工、明治37年5月捕獲 大正4年10月 金剛・比叡の36cm砲の実艦的として処分
鹿島	香取級二番艦	明治39年5月英国で竣工、大正14年1月 解体完了
生駒	筑波級2番艦	明治39年5月英国で竣工、大正13年11月 解体完了
鞍馬	鞍馬級1番艦	明治41年3月呉工廠で竣工 大正13年11月 解体完了、(1番艦筑波は大正6年火薬庫爆発で着底)
伊吹	鞍馬級2番艦	明治44年2月横須賀工廠で竣工、大正11年 解体完了
薩摩		明治42年11月呉工廠で竣工(日本の主力艦で始めてタービン推進を装備、大正13年 解体完了)
安芸	薩摩級を一部変更	明治43年3月横須賀工廠で竣工 大正13年9月 実艦標的として撃沈処分
土佐	土佐級1番艦	明治44年3月呉工廠で竣工 大正13年9月 長門・陸奥の主砲射撃実艦標的として撃沈処分
天城	天城級1番艦	大正12年三菱長崎造船所で進水、工事中止、魚雷、機雷、砲撃の実験に供用、大正14年海没
高雄	天城級3番艦	大正9年横須賀工廠で起工、大正12年航空母艦に改造着手、関東大震災で破損、解体
愛宕	天城級4番艦	大正10年三菱長崎造船所で起工、工事中止 大正14年船台上で解体
		大正10年神戸川崎造船所で起工、工事中止 大正14年船台上で解体

(4) ワシントン条約締結の前に廃艦となった戦艦 (初瀬、八島は日露戦争中旅順で沈没)

筑波	筑波級1番艦 (大正6年9月除籍)	明治41年3月呉工廠で竣工、大正6年月14日 横須賀港停泊中、前部火薬庫が爆発で沈没、152名が殉職 9月除籍
河内	河内級1番艦 (大正7年9月除籍)	明治45年7月横須賀工廠で竣工、大正7年7月12日 徳島湾停泊中、前部火薬庫の爆発で沈没、621名殉職 9月除籍

1 主砲砲身の破損と交換 (三笠)

三笠の主砲では日露戦争中に数回の主砲破損が発生している

- (1) 明治37年8月10日の旅順艦隊との第3回海戦の時
17時56分に露艦隊の砲撃に抛り後部右砲身の鑰鑿部より切断し
前部は海中に墜落した
この砲身用の交換は、旅順口陥落後に38年1月呉軍港で交換された
- (2) 明治38年5月27日の日本海海戦の時
前部12伊右砲
16時07分、臆発の形跡があり、検査するも異常なく、発射継続
18時04分、臆発か、天蓋の前部、砲身の一部破損、応急処置で
左砲のみで砲火を継続
- (3) 第1次右舷戦闘中、後部右中央揚弾機揚弾筒下辺に被弾、1時中止、左で対応
4分で復旧、

当時の砲身の耐久性については、不安が大きいものであり、特に主砲については、「魔の28発目」との言葉も使われた様子で第3回海戦後に三笠では、砲身の冷却についての対策を実施するとともに報告書を提出している

2 1項より、日露戦争に於ける富士・敷島級戦艦の主砲の状況

富士	黄海海戦	30cm砲の発射弾数84発(1門当たりの平均弾数21発)
	日本海海戦	30cm砲の発射弾数106発、 後部右砲砲身に被弾、使用不能となる 海戦後、6月6日に佐世保で換装、26日に完成
八島	旅順封鎖中、	37年5月15日にロシアの設置した機雷に触雷、沈没
敷島	黄海海戦	30cm砲発射弾数124発、前部左砲身に被弾砲鞍部破損 12月7日呉工廠で入渠、前部左砲身砲架換装
	日本海海戦	30cm砲発射弾数74発、前部右砲臆発にて使用不能 6月19日 呉工廠にて砲身砲架換装、7月10日完了
朝日	黄海海戦	特記事項なし
	日本海海戦	30cm砲発射弾数142発
初瀬	旅順封鎖中、	37年5月15日にロシアの設置した機雷に触雷、沈没
三笠	黄海海戦	発射弾数30cm砲172発、後部左砲臆発にて砲身折損 12月28日呉工廠にて、後部左砲身換装、1月完了
	日本海海戦	30cm砲発射弾数124発、前部右主砲臆発にて使用不能 7月20日 前部右砲身換装、8月24日完了

以上、「日本海軍の戦艦の図集」の記事によって列記したが、

三笠の戦闘日誌の記事によると、

黄海海戦の時、後部右砲身で、16発目発砲の際、火管破裂
ガスが噴出して発火装置、火管穴及び打針溶解したが、
緊急交換して、50分後に発射再開と記載され、
その後、第2次交戦の時、後部右砲身に敵弾命中、鑰鑿部より
切断して、前部は海中に墜落セリ、と記載されている。
(写真が添付されている)

3 総括 以上、日露戦争の時、富士1回、敷島2回、三笠2回と 3艦で計5回の主砲砲身の交換が実施されている

36式無線機の採用と実績について

嘉永6年(1853年) 米国のペリー提督が浦賀に来航し、大統領の親書を提出
翌安政元年(1854年)横浜で日米和親条約が締結された、この時の献上品に
エンボッシング・モールス電信機が含まれていた。

明治2年(1869年)には東京～横浜間の電報業務が開始され、

明治4年(1871年)には電信機器の国産化が始まった

1895年(M28) マルコーニが無線電信の実用化試験に成功

明治33年(1900) 海軍で無線電信調査委員会が発足した

明治34年(1901) 34式無線電信機が採用されたが、到達距離不足として、配備とはならず
1月から1等巡洋艦以上の各艦から下士官の優秀者20名を選抜し講習
その後、士官10名の無線講習と続いた

明治35年(1902) 2月に英国で三笠竣工、日本海軍に引渡され、5月横須賀港に到着

明治36年(1903) 36式無線機完成、12月に第1艦隊6隻、第2艦隊4隻、第3艦隊3隻の15隻、
引き続き、三笠を含む17隻に無線設備設置が令せられ、
日本海海戦の時には仮装巡洋艦、駆逐艦まで装備されていた

当時の諸外国の状況 (外波委員長、木村委員の調査による)

米国 世界一の有線電話網を完成し、部品、機器に優秀な物があったが、無線電信には
が付けられていなかった

英国 当時世界の最先進国であった。

獨・仏 特に新しいものはなかった

露(バルチック艦隊) 日本海海戦の時、独のテレフンケン社(又はスラヒー社)の優秀な
機器が搭載されていたが、要員の教育は進んでいなかった、と伝えられる
また、幕僚の一人が記した手記には「和泉」の電波をロシアの仮想巡洋艦
「ウラール」が受信し、通信の妨害を申し出たが、ロジェストウエインスキー提督は
妨害は不要と訓令したとされている。また、戦後の日本側の調査では、ロシア
の艦艇の無線装備率は30%程度とされている。

年月日	記事		
M27(1894)-08-01	日本清国に宣戦布告		
M27(1894)	富士級2隻が起工		富士:8/1、八島:12/6
1895(M28)-05-07	ポポフ無線通信		ポポフ(ロシア)が無線の公開実験成功
1896(M28)	マルコニー通信成功		マルコニー(イタリア)は12Kmの公開試験成功
M30(1897)	富士級2隻竣工		富士:8/17、八島:9/9
M30(1897)	敷島・朝日起工		敷島:3/29、朝日:8/19
M31(1898)-1-10	初瀬起工		
M32(1899)-1-24	三笠起工		
M34(1901)-1-18	初瀬竣工		
M35(1902)-3-1	三笠竣工		
M34(1901)-10-01	舞鶴に入籍		
M34(1901)-10-18	34式無線機採用		M35に18.5漕の実験成功したが配備に至らず
M35(1902)-03-15	英国出港		
M35(1902)-05-18	横須賀着		6/12~7/20船体修理
M35(1902)-09-01	常備艦隊編入		M36-04-12~M36-08-31予備艦
M36(1903)-09-01	常備艦隊編入		旗艦として東郷中将座乗
M36(1903)-12-26	36式無線機配備決定		36式無線機の15+17艦への配備決定
M36(1903)-12-28	聯合艦隊発足		三笠第1艦隊第1戦隊編入
M37(1904)-02-06	出撃		聯合艦隊旗艦として佐世保出港
M37(1904)-08-10	黄海海戦		後部左主砲膛発にて砲身切断
M37(1904)-12-28	呉工廠着		後左の主砲、15cm7門の砲身換装
M38(1905)-02-06	佐世保出撃		
M38(1905)-05-27	日本海海戦		前部右主砲、膛発にて使用不能
M38(1905)-05-30	佐世保帰投		船体機関修理、6月3日完成
M38(1905)-07-20	呉工廠にて修理		前部右砲身換装他
M38(1905)-09-05	ポーツマス講和条約		日露講和条約調印
M38(1905)-09-11	火薬庫の爆発で爆沈		0030出火、0140火薬庫爆発、0230着底
M39(1906)-08-28	浮揚		
T01(1912)-10-03	火薬庫火災		前部火薬庫に注水(「三笠」の生涯に記載)
T07(1918)-08-24	小修理他		兵器防寒設備工事、8cm高角砲2門装備
T07(1918)-10-02	ウラジオ方面出動		
T10(1921)-09-16	座礁		アスコルド水道ウンコブスカゴ列島で座礁
T10(1921)-09-26	離礁		富士他の援助で離礁、ウラジオに帰着
T10(1921)-10-01	ロシア海軍工廠入渠		応急修理実施、10月22日出渠
T12(1923)-09-01	関東大震災		横須賀港内岸壁繋留中前部に浸水
T12(1923)-09-20	除籍		
T14(1925)-04-06	保存決定		横須賀鎮守府(三笠保存会)に命令
T14(1925)-10-22			保存位置に移動
T15(1926)-11-12	保存式典挙行		
S20(1945)-08-30	終戦		米軍進駐
S36(1961)-05-27	復元工事完成		

注記、三笠は敷島級の4番艦とされているが、何点かの設計変更が実施されている

1. 装甲鋼板が、ハーベイ後半からクルップ甲板に変更し、厚みを若干減じている
2. 砲塔構造の給弾方式を敷島級が弾庫から砲塔内に直接給弾していたものを一旦換装室に揚げ、ここから砲塔に給弾して、装填速度の向上を図った
3. 副砲のケースメート構造を変更 等